

①輸血はいけないのか？

聖書の教えから輸血を拒否する人たちがいます。神が洪水後のノアに、「肉は命である血を含んだまま食べてはならない」（創世記 9:4）と言われた個所、「血を食用に供する者はすべて自分が属する民から断たれる」（レビ記 7:27）などの旧約聖書の教え、そしてここ新約聖書にも、「血を避けるように」（使徒 15:20）とあることなどから来ています。はたしてこれは聖書の正しい理解の仕方なのでしょうか？

②目を向けるべきは、パウロが示した方向。

もし、「聖書のここでそう言われているから」と言うなら、パウロは別の所でこう語りかけています、「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、私たちもキリストを信じました」「私は、神の恵みを無にはしません。もし、人が律法のおかげで義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます」（ガラテヤ 2:16, 21）。聖書全体は、何を告げようとする方向に向かって行っているのでしょうか？ 私たちの神の戒めの成し遂げ（律法の実行）による救いではなく、それを為し得ない私たちを御子の十字架の死による神の救いの方向です。聖書はその中のそこここからではなく、その向かう方向のゴールから考えなければなりません。上に引用したパウロが語っている内容こそ、まず私たちが考えなければならないゴール、恵みのゴールの内容です。

③キリストへの信仰が生み出す寛大さ

パウロは、偶像の神など存在しないのだから、偶像に供えられた肉を食べても心配ないと語ります（コリント一 8:1 - 6）。イエス・キリストの神を心から信じているからです。しかし同時に、律法を守ることで神への誠実を真剣に考えている人の前で、何も偶像に供えられた肉を食べて見せることはないとも語ります（同 8:7-13）。信仰者の目指すべきは「正しさの追求」ではなく、「愛の追求」であることをよく示す例です。本当の信仰は、神を信頼した寛大さを生み出します。